

大分県地方史研究会の五〇年を振り返って

橋本操 六

私と地方史研究会との関わり

昭和三十一年に大学を卒業するの同時に、私は大分県立教育研究所で『大分県史料』の編集に携わることになりました。それから足掛け五年、第一期の中史料刊行が一段落しました。その間に中津の『惣町大帳』の筆耕にも関係していました。翌昭和三十六年から社会教育課に配属となり、そこに渡辺先生からその内容をまとめて出すようにとのお話があり、昭和三十六年に『大分県地方史』の二四、二五号に「豊前中津藩における町人の生活―享保年間の変遷を中心として」という論考を寄せ、発表を行ったのが、私と大分県地方史研究会との最初の出会いです。

私が社会教育課に転任した時、同課では地方史に対して当時補助金をだしており、代わりに地方史から実績報告書として毎回会報を三冊ずつ提出してもらっていました。変な話ですが、当時提出された会報などは保管する場所も無く、一部は処分されておりました。私は、社会教育課および文化課に居た十二年間、文化財の担当としてあり、それらを全て貰い受けていました。ですから、この期間に発行された会報は複数持っております。そしてこの間、地方史に原稿などを書いたりはしましたが、正直言ってあまり関わりをもってはいませんでした。正式に役員として関わりを持ったのは、文化課から総務課へ転任した昭和四九年以降のことになります。私が役員として加わった当時、会の会計は単にその収支を総会で報告するだけという状況で、予算とか、その補正といった考え方もなく、また会費の運用にあたって理事会なり委員会なりの承認を経るといった手続きもなされてはいませんでした。それではいけないと主張し、会計の立て直しを行ったような次第です。

その内に、昭和五八年婦人会館で総会が行われたことがありました。その頃、竹内理三先生が若い人の出版を助成しようと

自らが得た賞金をそのまま提供して「戊午叢書」なるものを作られていまして、渡辺先生もこれに触発されて、一〇〇万円を寄付して「渡辺賞」を作られました。当時は利子がよくて一年間で一〇万円が付いたように記憶しています。そして二人に五万円ずつ渡辺賞を出すことになりました。このとき地方史の編集担当を私が仰せ付かり、芦刈政治さんと中山重記さんに論考を寄せてもらうように頼み込み、そして婦人会館で総会を開いて第一回の渡辺賞を芦刈、中山兩人に贈ったわけです。このことを契機にして、地方史に本格的に関わるようになりました。

渡辺澄夫・竹内理三の両先生の思い出

永く地方史の会長であられた故渡辺澄夫先生との思い出を振り返ると、私と先生と関わりは、『大分県地方史』よりも、どちらかと言えば『大分県史料』の方が多くありました。渡辺先生というのは、大変真面目な方で、県史料の校正を頼むと、当時大分大学まで津久見から通われていましたが、あのゆるゆるの汽車の中で、頭注の小さな字まで丁寧に直されていました。その頃の先生の研究室は駄原にあった旧大分連隊の兵舎を引き継いだもので、私はそこまで自転車で校正をお願いにいったものです。卒論の指導を仰ぎにいった時もその旧兵舎におられました。そういうながきに渡る付き合いがありますから、直ぐにでも地方史に入らなければならぬわけですけれども、当時私は左程勉強する気はありませんでした。前述したように『惣町大帳』を使って書き、それを先生から発表するようにとのお言葉があり、これがあって会員となり、経理等に行き詰まっていたのでしょうか、しばらくして先生から役員になって加勢してくれないかと言われ、承諾した次第です。そこで、前述したような会計の改革を行ったわけです。

渡辺先生が古稀をむかえられた時、先生は記念論文集の発刊を希望されました。永年先生が勤められた大分大学の出身者が音頭をとって行われるものとはかき思っていました。が、なかなかその動きがみられません。私は、熊本大学の出身ではあったわけですが、卒論の時から渡辺先生にお世話になっており、勤めだしてからも先生と一緒に仕事をやってきました。このこともあって、それでは私が音頭を置く県史編さん班で音頭をとってやろうということになり、渡辺先生をよく知る諸先生方

に頼んで論考を寄せてもらい、「九州中世社会の研究」なる本を出版しました。このとき、祝い事でもあるから竹内理三先生にも書いていただこうと思ったのが、浅はかでした。後輩の記念論文集に先輩が書くというのは学会ではタブーになっていたでしょう。結局、竹内先生から寄稿してはいただけませんでした。

また、その竹内理三先生との関わりも大きな思い出の一つです。県史料で解らない時に、電話ではどうにもならないわけで、九州大学の竹内先生のところまで朝も暗いうちから起きて講義が始まる前に教えを乞いに行きました。驚いたことに、竹内先生は自分の研究室で寝泊りされていたことです。研究室のソファで寝られ、目がさめたら仕事をする、そういう生活を三、四年間なさっておられました。また、たいへん遠慮深く、またシャイな方で、でしゃばるところも全くない、そういう人でした。もう一つ、竹内先生は常に古文書を読まれており、文字を忘れることはありませんでした。こういう癖の字はこの字だというように、頭の中にキチンと入っているわけです。編集会議で私はこれとこの文書がつながるとか、つながらないとかいうことを最初させられていましたが、一、二年経つうちに橋本君も校正をしないといふことで、校正をするようになりました。ある時、隣合せに座っていた某先生が橋本君これはこのように読めないかと言われことがありました。私は仕事柄、毎日、朝・昼・晩、文書を見ているわけで、先生、それはこのように読むのでないでしょうかと答えた時に、この会話を聞いていた竹内先生が某先生に対して大変情けないというような顔をなさったことが凄く印象に残っています。文書は常に読まないで、読めなくなるということを強く教えられた気がします。

私は、直接指導をうけたわけではないけれども、竹内先生や渡辺先生という超一流の先生から本当にいい人生経験をさせていただきました。

最後に、苦言を申すようですが、最近の地方史研究会の総会をみると、発表者の態度があまりよくないような気がします。地方史の会員は何事にも真摯であるべきだと思います。